

暗黒の1847年

—— カナダにおけるアイルランド移民受け入れ ——

佐藤 郁*

はじめに

19世紀半ばにアイルランドで発生した大飢饉の後、アイルランド人を乗せた移民船、いわゆる「棺桶船」(Coffin Ship)の多くが目指した先はアメリカであった。大飢饉後もヨーロッパからの移民の波はおさまらず、ニューヨーク沖のエリス島にはその受け入れ口として、新たに移民局が置かれた(1892-1924)。船上の簡単な検査と手続きで済む一等や二等の船客は直接マンハッタンに上陸したが、貧しい移民の多くはいったんエリス島に降りたって、検査や手続きを受けた。エリス島は新たな希望の地の入り口であり、しばらく離れ離れになっていた親族や友人との再会を果たす喜びの場となったが、一方で、検疫や手続きに合格せずに島に拘留される者、眼病などのために帰還を命じられる者、絶望から命を自ら絶つ者もあった。¹⁾ こうして、移民の悲劇、喜劇の舞台となったエリス島は、アジア系移民の入り口となった西海岸のエンジェル島と並んで「涙の島」(Isle of Tears)と呼ばれた。

しかし、移民が向かった先はアメリカばかりではない。大飢饉の時代、急増する移民を制限する目的でアメリカが制約を設けたことによって、多くの「棺桶船」がカナダへと行き先を変えた。本稿では、エリス島と並んで大量のアイルランド移民を受け入れ、「死の島」(Isle of Death)と称されたカナダの移民検疫所グローセ島における大飢饉時代の移民受け入れの状況などについて概観してみたい。

1. グローセ島小史

セント・ローレンス川に浮かぶグローセ島はケベックの下流約48kmに位置する。フランス語で「大きな島」を意味するが、実際には全長約2.5 km、幅約0.9 kmの小さな島であり、19世紀の初めには、ケベックの市民がピクニックに訪れる風光明媚な憩いの場であった。

ナポレオン戦争(1796-1815)後、ヨーロッパからの大量移民によって北米大陸は伝染病流行の危機にさらされた。セント・ローレンス川経由でカナダへ入ってくる移民に対してはケベックとニュー・ブランズウィックが受け入れ口となっていた。ケベックの場合、当初対岸にあるポンテ・

*東洋大学国際地域学部講師

レヴィに検疫所が設けられていたが、疫病を上陸させない目的で、1832年にグローセ島に検疫所が移された。冬期には川が凍結してしまうため、例年5月半ばから11月半ばまでが開所期となっていた。島には病院、教会、救護施設のほか牧場や畑もつくられ、滞在者や関係者に食糧を提供した。

1844年度には3万人台だったアメリカ合衆国へのアイルランド移民は、翌45年度すなわち大飢饉の始まりの年には4万人台へと約1万人増加していた。²⁾ アイルランドおよびスコットランドでの飢饉の報せはアメリカ、カナダにも届き、アイルランド移民の抑制と伝染病の予防のために、アメリカはいち早く手を打った。一隻あたりの乗客数の上限を制限する法案と、アメリカへの最低運賃を値上げする法案を通過させ、1846年5月から施行したのである。この措置にもかかわらず、アメリカでは1847年度（1846年10月～1847年9月）のアイルランドからの移民数は前年度の2倍以上の約10万5千人にも膨れ上がった。その数は実に、移民全体の約45%にあたった。

カナダへ流れ込んだのは、最低運賃の値上げによりアメリカへ行くことができなくなった貧しいアイルランド人であった。地主が小作人を土地から追い立て、船をチャーターしてカナダへ送った例もある。当時まだイギリス領であったカナダは独立国家アメリカのようにアイルランドやスコットランドからの移民抑止の対策を積極的に講じることができなかった。また、カナダからアメリカへの入国は容易だったため、いったんカナダに上陸し、落ち着いてからアメリカへ移動しようとする者も多く、アメリカを最終目的地とする貧しい移民の多くが経由地としてここを目指したのである。こうして、アイルランドにとっての「暗黒の1847年」は、グローセ島にとってもまた「暗黒」の年となった。

1847年、ケベックを目指してヨーロッパを旅立った移民は約98,000人（うちアイルランド人は約78,700人で、全体の約8割）に上った。³⁾ ケベックを目指したといっても、全員が無事上陸できたわけではなく、船上での死亡者は約4,100人、また、約13,500人が上陸後にグローセ島やケベックの病院などで死亡した（表1参照）。この年、グローセ島の墓地には5,424人が埋葬されたが、その多くがアイルランドからの移民であり、混乱の中で名前もわからぬまま埋葬された者もあった。5月から8月は、毎日50人ほどが埋葬されていたが、150人が埋葬された日もあると述べる者もある。⁴⁾ さらに不幸なことに、洋上で遭難し、全員の命が失われた船もあった。⁵⁾

グローセ島で病人の治療や世話を当たった医師や看護婦、聖職者は、カナダ側の人々の中でも、もっとも伝染病感染の危機にさらされ、多くの犠牲者を出した。かつて1832年にも、移民の流入に起因するコレラの流行で多くの市民を失ったケベックは、大飢饉の際にも危機意識を強く抱き、緩慢な政府（カナダ立法議会）の動きを期待することなく、いち早く措置を講じた。加えて、フランス系の移民が多いケベックでは、イギリスへの対抗意識から生じるアイルランドに対する同情、そして同じカトリック教徒のアイルランド人に対する宗教的な同胞意識があった。募金活動や種々の施設での奉仕活動に加え、孤児を引き取る家庭が少なくなかったのはこのためである。グローセ島に足止めされていた移民は病状が落ち着くとケベックの病院や施設へ移るのが通例であり、このように、ケベックの市民は大飢饉から逃れてきたアイルランド人を島の内外で受け入れていた。

1847年、関係者からの強い要請により島には収容施設や病院が急ピッチで増設されたが、絶え間

表1 1847年 ケベック港入船数その他

	出 港 地	ケベック 入 船 数	船 室 乗 客 数	船 倉 乗 客 数	船 上 死 者 数	島 内 死 者 数	病院内 死 者 数	総死者数	死亡率 (%)
5月	アイルランド	18	12	5,298	110	4	81	195	3.67
	イギリス	37	99	2,214	18	2	43	63	2.72
	ドイツ	2	0	280	2	1	0	3	1.07
	小 計	57	111	7,792	130	7	124	261	3.3
6月	アイルランド	75	68	18,345	790	281	483	1,554	8.43
	イギリス	48	87	12,224	599	369	600	1,568	12.73
	ドイツ	4	0	606	4	0	0	4	0.66
	小 計	127	155	31,175	1,393	650	1,083	3,126	9.98
7月	アイルランド	53	72	13,723	497	90	431	1,018	7.37
	イギリス	35	76	10,436	401	166	416	983	9.35
	ドイツ	13	3	2,847	48	2	1	51	1.78
	小 計	101	151	27,006	946	258	848	2,052	7.56
8月	アイルランド	47	81	10,961	575	115	475	1,165	10.54
	イギリス	26	52	7,585	626	143	684	1,453	19.03
	ドイツ	15	6	2,762	12	1	0	13	0.47
	小 計	88	139	21,308	1,213	259	1,159	2,631	12.27
9月	アイルランド	21	23	3,452	79	12	60	151	4.34
	イギリス	26	81	3,097	157	2	70	229	7.2
	ドイツ	2	0	715	25	0	0	25	3.49
	小 計	49	104	7,264	261	14	130	405	5.5
10月	アイルランド	5	28	1,029	18	0	3	21	1.98
	イギリス	11	31	1,100	55	2	41	98	8.66
	ドイツ	0	0	0	0	0	0	0	0
	小 計	16	59	2,129	73	2	44	119	5.44
11月	アイルランド	1	1	169	4	0	0	4	2.35
	イギリス	2	2	491	65	0	0	65	13.18
	ドイツ	0	0	0	0	0	0	0	0
	小 計	3	3	650	69	0	0	69	10.49
合 計		441	722	97,324	4,085	1,190	3,388	8,663	8.84

本表は『証言 グローセ島 1847年』採録の表8 (pp.340-356) の項目を一部抜粋の上月別、出港地別に筆者が統計を出したものである。

なく押し寄せる移民の数に追いつかず、多くの者が収容や治療を受けずして亡くなった。だが、彼らの死は無駄になったわけではない。1860年代以降、施設の充実や検疫体制の強化、消毒作業や予防接種の徹底などにより、グローセ島はアメリカから視察団が訪れるような模範的な検疫所となった。その後、第一次大戦(1914-1918)と大恐慌(1929)は移民の数を激減させ、移民の波が引いた

1937年、グローセ島は検疫所としての役目を終えた。1996年、カナダ政府はこの島の国立歴史地所 (National Historic Site) を「アイリッシュ・メモリアル」(Irish Memorial) と呼ぶことを決定した。現在はカナダ公園局の管理のもと、研究員らによって調査や研究が続けられている。一般の者も、島周辺の都市から出航するフェリーによって島に渡り、ガイド付きのツアーで島内を見学することができる。

2. 1832年の経験

暗黒の1847年の移民受け入れについて検証するにあたって見過ごすことができないのは、それに先立つ15年前の悲劇である。この年の経験がなければ、1847年の死者はもっと多くなっていたはずなのである。

1832年初頭から、ヨーロッパではコレラが流行し、カナダでもそのことが新聞等により大きく報じられた。この当時コレラの発病原因や治療法は解明されていなかったため、コレラ菌を持つ移民を受け入れることは、ケベック市民にとって、死を受け入れることと同義であった。インドでの勤務経験があり、コレラについていくらか知識のあった医師の助言により、ケベックの移民検疫所が急きょグローセ島に移されたのは、このときのことである。

この島は本来個人が所有するもので、島には農夫一人が居住しているだけだった。そこに、病院として使用する粗末な建物を数軒、短期滞在者を収容する小屋、パン焼き場、売店などを急造した。

しかし、5月から来航し始めた移民船の中には、島を素通りしてケベックに入港してしまう船もあり、ケベック市の移民局長アレグザンダー・ブキャナンは特に衛生状態のひどいアイルランドからの船に対し苦情を申し立てたが、医師らのコレラに対する知識も不十分だったため6月初めからコレラと思われる症状で死亡する移民が出始めた。そのことが新聞で大きく報じられた数日後、コレラはケベック市内で一気に流行し始め、病院は人であふれかえった。病気を恐れた農夫らがケベックへの農作物の運搬を控えたため、逆に市民が農村部へ押しかけ、かえって流行を拡大させることとなってしまった。6月末までのケベックでのコレラ患者は約700人、うち約420人が死亡した。また、移民の移動などにともない、コレラはカナダ国内に広がっていき、モンリオールでも7月初めまでに約1,000人が発症した。当時のカナダ国内の混乱ぶりが下記の一節から十分に伺えよう。

ハミルトンでは7月初めからコレラが発症し、市当局は「地獄を避けるにはそれ以外ない」という理由で、刑務所を開放し死刑囚をのぞく囚人すべてを解放した。(中略)ナイアガラ半島でコレラが発症すると、ウェランド運河の労働者400名のうち370名がショベルを置いて逃げ出した。⁶⁾

コレラの流行が収束するかに見えた6月下旬には、いったん船の検査が中止されたが、ほどなくしてコレラが再び流行し、検査も再開された。グローセ島では、移民が衣服を自ら洗濯して岩の上

に広げて干す光景が見られるようになったが、その後も6月ほどではないにしろ、コレラ患者は出続け、結局この1832年、コレラのため船上または検疫所で死亡したのは約2,350人、カナダ国内では約6千人が発病し、モントリオールでは約2千人、ケベックでは約1,500人の死者が出たのであった。

1832年の経験が、1847年の大惨劇を検証する上でも重要であるのは、二つの理由による。第一は、伝染病を文字通り水際で食い止めることの重大さをカナダ国民が身をもって知ったということである。この教訓とひきかえに、カナダ人は多くの同胞を失い、忘れえぬ犠牲を払ったのである。グローセ島に検疫所を移転させたのは、必然かつ賢明な判断だったと言えよう。

第二は、病原菌を有する大勢の移民たちを受け入れることに対する、その準備や予行練習という意味での重要性である。大勢の移民を受け入れるには、大勢の医師や係員、施設、薬品などの物資が必要である。アイルランドからの移民に対しては食糧も用意しておかなければならない。伝染病が流行すれば病院ではパニック状態が発生する。警告があり、準備をしていたにもかかわらず、1832年の場合、カナダの人々は大きな犠牲を払う結果となり、準備や知識の不足が反省された。その後15年の間に、グローセ島の施設は拡充され、牧場や畑までもつくられた。

このようなことは、すべて、カナダ国民の経験として、1847年に生かされたのである。1847年の惨劇はその規模があまりにも大きすぎたため、大量の死者を出す結果となってしまったが、1832年の経験がなければ、被害は実際の数字の数倍にも及んでいたかもしれない。

3. 「棺桶船」に乗って

マリアナ・オガラガおよびローズ・マゾン・ドンピエール編著の『証言 グローセ島 1847年』は、当時の新聞記事、関係者の手紙をはじめ、教会や行政の記録などを豊富に採録した大変有益な書である。この章では、これらの資料と、1847年8月にカナダへ渡航したアイルランド人男性ジェラルド・キーガンの日記を軸に、「暗黒の年」すなわち1847年、グローセ島でいったい何が起こっていたのかを見てみたい。

5月 検疫所では移民を受け入れ、彼らの精神的、肉体的ケアをする準備が整えられていた。5月14日、最初の船、シリア号が島に到着、乗客とともに病いや死も到来した。新聞の報告記事はシリア号到着の後、恐ろしさを増す一方だった。最悪の予想が悲しい現実となったのだ―1847年は例を見ない年になるだろうという予想が。

検疫所のダグラス医師は緊急事態に応じて人員の増強を要請した。シグネイ司教は島に更なる司祭を派遣した。⁷⁾

1847年を全体的に見れば、57隻が入港した5月はまだ悲劇の序章だったと言えよう。乗客総数は7,903名、船上での死者は130名、島内での死者は7名だった。それが6月になると入港数は127隻、乗客総数は31,330人、船上での死者は1,393名、島内での死者は650名と急増している。この年、死者

がもっとも多かったのは6月であったが、死亡率の点からいうと8月が最悪であった。(表1参照)

8月に渡航したアイルランド人男性医師ジェラルド・キーガンの当時の日記が単行本として出版されている。⁸⁾ この書は、本人が書いたものであるという十分な証拠がなく、脚色されている部分があると複数の研究者から指摘されているが、読み書きのできない貧しい移民の多かった当時の一般的な移民の状況を伝えるものとして、参照してみたい。

キーガンの日記は渡航前の2月に始まり、小作人と見られるおじがキーガンに助言を求めてきたことが記されている。土地は地主のものであっても、荒れた土地を苦勞して収穫のあがる土地に変えたのはおじ一家であり、家屋もおじ自身のものであるのに、それらを手放してカナダへ渡るよう助言すべきかどうかキーガンは思案している。6月以降の拡大救貧法は、小作人の立ち退きに拍車をかけた。地主は抱える小作人の数に応じて税金を徴収されるようになったため、渡航費と引き換えにしてでも小作人を追い払おうとする地主が多く現れたのである。

当時ロスコモン州ストロークスタウンに実在したデニス・マホンは悪名高き地主の一人であり、この年の11月に暗殺されたのだが、彼が退去させた人数は3,006人に上り、うち約1,000人をチャーター船でカナダへ送り出した。グローセ島の主任医師ダグラスも、その船のひとつについて手紙の中で言及している。

これらの船のうち、リバプールから来たヴァージニアス号のことを述べましょう。乗客476名のうち158名がグローセ島に到着する前に亡くなりました。その中には船長、航海士、9名の船員も含まれていました。残ったわずかな船員が苦勞して、乗客の助けを借りながら錨を下ろし、帆を巻き上げたのです。⁹⁾

158名という死者数は、この年にケベックに入港した船の中で最悪の数字である。カナダへの渡航費は当時の金額で1～2ポンド(アメリカへの運賃のほぼ半額)と安いものであったが、貧しい小作人の多くはそれさえも用意することができず、土地から立ち退くことで北米大陸への切符を手に入れるしかなかったようである。船上の死亡者数を見ても、マホンの小作人たちがいかに悲惨な状況におかれていたか、推測することができよう。

当時のケベックでは、イギリス政府の方針によって、イギリス、アイルランド以外ではドイツ船しか受け入れていなかった。しかし、同じ移民船でもドイツからの船は、イギリス、アイルランドからの船とはまったく様相を異にしていた。検査のためドイツ船に乗り込んだグローセ島のジャックス医師は「みな気持ちのよい清潔な身なりで幸せそうだった。乗客には病人がなく、きれいな髪の子供たちが笑っていた…甲板は美しい賛美歌を歌う移民でいっぱいだった」と驚きを隠さないでいる。¹⁰⁾

これに比べ、イギリス、アイルランドを発つ船はひどいものだった。当時のイギリスの法は、乗客1人1日1ポンド(約4,544g)の食料を用意することを定めていたが、実際にはそれに満たず、また、カビが生えていたり、不衛生なものが多かった。水も同様で、不潔な古い樽に入った水は漏れ

出してしまうこともあった。このため、移民はできるだけ食料を持参して乗船するよう勧められていたが、それができる者は少なかった。また、この当時、移民幹旋人は自分が集めた乗客の数に応じて報酬を受けていたため、時には船内の環境や、食糧のことなど、実態をごまかして移民をかき集めていた。実際には、手持ちの食糧が尽きた場合は船長から高い値段で食べ物を買わなければならない、貧しい移民の多くは飢えを耐え忍ぶしかなかった。

移民を乗せる船は、元々、カナダから毛皮や木材をヨーロッパへ運んだ船で、平均的なもので全長約30m、幅約8mほどであったという。貨物船であるため客室というようなものはなく、天井までの高さは160～170cm程度だった。カナダから運んできた荷をおろすと、船倉の両舷に2段ベッドのような棚が設置され藁が敷かれた。当時のイギリスの法はこのスペースに2,400人の収容を認めていたが、実際には子供の数え方がいい加減で、もっと多くの人間がつめこまれていた。

アフリカからの奴隷輸送船については1人10平方フィート（約3㎡）のスペースの確保が義務付けられていたが、移民船はそれを下回る劣悪な環境だった。奴隷船は商品としての奴隷の価値を落とさないために、ある程度の環境を保つ必要があったが、移民船は乗船前に船賃を受け取ってしまったら、運ぶ側の責任はそれで終わりと考えられていたからである。ベッドの1段には4～5人が横たわり、寝返りもろくに打てない状態だった。食堂などがあるわけではないので、このベッドが家族の居間になり、食堂になり、寝室にもなったのである。

衛生状態を劣悪にした最大の要因は便所である。船首に便所が設置されていたが、不潔きわまりなく、設置場所が危険であり、また、ドアが風で開けば甲板にいる人から丸見えになるため、乗客は使用を嫌った。非常に粗末なつくりの小屋で、強風や荒波を受けて壊れてしまうこともしばしばだった。乗客は船倉内のしびんで用を足していたが、数が足りないことも多く、その結果、船倉内の床や壁に直接用を足してしまうことになった。船倉には舷窓も換気装置もなく、甲板への出入口が2、3箇所あるだけで、天候が許せば甲板に出て外の空気を吸えるが、嵐がくれば乗客は皆その穴蔵に閉じ込められた。乗客は何十日もの間身体を洗うこともなく、ベッドの寝藁は湿気で腐り、船倉内は汗や汚物のおいが入り混じり鼻をつく異臭をはなった。

1845年夏に始まったジャガイモ飢饉は、翌46年のいっそうの不作により、チフスや熱病の蔓延と大量移民を生み出した。移民はアイルランドを発つ前に医師の検査を受けるが、ぞんざいなものであったし、もともと栄養不良の者が多く、船上での病気の発生や蔓延は避けられないことであった。コレラ、チフス、赤痢、天然痘のほかに、原因不明の高熱がしばしば発生し、「船の熱」(ship fever)と呼ばれた。船上で亡くなると、遺体は船員が鉤で引きずり出し、海へ葬っていた。あまりの数の多さに、船長が船員に金を渡したこともあった。¹²⁾ また、到着が近くなると、遺体はまるで木材のように綱で束ねられて上陸を待ったという。

当時、カナダまでの船旅は40～50日かかるのが通例だったが、やっとのことでセント・ローレンス川に入っても、グローセ島への着岸を待つ船が3kmに渡って40隻も並んでいた日もあり(5月31日)、移民は長い船旅の後、目的地を目の前にしながら、暗い船倉で何日も待たされることがあった。キーガンの日記には、川に浮かぶ遺体のことが述べられている。

グローセ島に着く数日前、我々が甲板に出ていると、暗い川の中をいくつかの遺体が流れていくのに気がついた。船の脇から見るとひとつの遺体が錨の鎖に引っかかっていた。前方の船でも遺体を投げ下ろしていた。¹³⁾

この年、ケベックに入港した移民船の中で、船上で100名以上の死者を出した船は4隻、死者総数は4,085名であった。しかし、苦難の末にたどり着くその島も、安楽の地ではなかった。島内および島の病院で亡くなった人は4,578名に上った。この島が「死の島」と呼ばれたゆえんである。

4. 「死の島」 グローセ島

前章では主にアイルランドからグローセ島までの船旅の苦労を扱ったが、この章では、島到着後の状況などを当時の手紙などを通して見てみよう。

船が島に到着しても身動きもできず、病院へ運ばれる間もなく亡くなる人も多かった。飽和状態の島では乗客の受け入れが進まず、錨を下ろしたまま何日も島のそばで待つ船は浮かぶ病院と化していたからである。

今日私は船のひとつで5時間を過ごしました。大勢が乗っており、大勢が病人となっていました。神よ、そこでは私達も大変危険な状態におかれます。私達が船にいる間も島の病院では秘蹟を受けずに亡くなっていく人達があります。私は今日聖職者服を脱ぎませんでした。いたるところで秘蹟を求める人々に出会います。船員達が病院まで運べずうち捨ててしまうため、岩場や海岸などで亡くなって行く人達があります。(バーナード・マクガラン副司祭の手紙、5月24日)¹⁴⁾

カトリック教会、英国国教会、双方の聖職者が、本来の職務だけでなく、たとえばテントの設置といった作業にもたずさわり、寝食の間を惜しんで移民に尽くした。彼らが瀕死の移民に与えた喜びはいかばかりであったろうか。次の引用からは、聖職者と移民の出会いの歓喜がうかがえるが、それと同時に、目的地を目前にしながら死を待つしかない人々に対し、精神的な慰めしか与えることのできない聖職者の虚無感もまた伝わってくる。

われわれは停泊中の船を分担しあって、各人が何隻かずつ訪ねることになっていました。このようにしてわれわれと移民は知りあい、いたるところで彼らは両手を広げて私達を歓迎してくれるのです。彼らによる祝福の言葉や愛情のしるしは生気にあふれ、真心がこもり、私達に勇気と慰めを与えてくれるのです。

孤児の数は大変なもので、悲しいことに私達には、ほかの母親にその子たちを託して、食べ物を買ってやって欲しいと金を渡すことしかできません。しかし、彼らの多くもいずれ、ほか

の人達と同じように死ぬのです。この島で彼らを待ちうける不幸をまだ知らずにいるのは幸いです。(タチェリュウ宣教師の手紙、6月3日)¹⁵⁾

移民船が到着すると医師が乗り込み検査が行われたが、上述した伝染病については、まだその原因や治療法、潜伏期間が十分に解明されておらず、健康と診断された者の中にも後日発症して死亡する者が多く出た。

5月にはすでに島内の病院(定員150名)に200人が収容されていた。急ごしらえの粗末な小屋や雨の吹き込むテントにもベッドはあったが、数は少なく、そのほかは寝わらがあればいいほうで、板や地べたに横たわる人々も多くいた。1つのベッドに性別に無関係に2～3人が詰め込まれていた。病人が亡くなって空いた場所は、掃除も消毒もされぬまま、すぐに次の病人が横たわった。

病人から助けを求めるうめき声があがっても、それに差し伸べられる手はあまりにも少なかった。キーガンの日記は「熱病小屋」(fever shed)で息をひきとる妻を描いている。

雨が続き、東風が粗末な目張り板の隙間から吹き込んできた。なんという夜だったろう!私の上着を妻にかけ、冷えた身体に温かみを分け与えようと彼女を自分の胸に引き寄せた。そして、朝になればと言って妻を励まそうとした。だが、朝が来たとき、妻はもう動くこともできず、熱と寒気が交互に襲ってきた。私は医師をさがしたが、病院にはいなかった。移民船がまた到着して、そちらへ行っていたのだ。(中略)私のしつこさに負けて医師がやってきたのは夜だった。彼はちょっと診ただけで、2、3行のメモを書き、それを持って病院へ行って薬をもらえと言った。¹⁶⁾

実際、熱に浮かされさまよい歩き、海岸や藪でのたれ死にする者も多く、そのような者はその近くに埋められたが、穴が浅ければ鼠の餌食となった。墓地でも盛り土が不足して鼠に荒らされるということがあったため、ダグラス医師が土の搬送を関係者に要請した記録が残っている。医師や看護婦、補助員、物資などが次々と追加されてはいたものの、それをはるかにこえるスピードで移民が流入し続けたのである。グローセ島はまさに「死の島」そのものだった。ダージョン主教も次のように述べている。

ところでグローセ島の状態は驚愕すべきものです。地元当局の努力もあふれる悲惨な移民の波の前には無力に見えます。昨日再び、病人が船倉で惨めにしておりました。島では彼らを受け入れる場所がなかったからです。島ではすでに大勢の病人がテントで寝ています。この暑さで消耗し、病の息を吐いています。彼らの世話をしている者にとっても死を招くものです。小屋の2つでは、まだ2段ベッドがあり、性別に関係なく一緒に寝かされているため、誰でも容易に想像できるように、病の種を交換しあっているのです。(ダージョン主教の手紙、7月10日)¹⁷⁾

このような惨状の只中であって、関係者はただ嵐が過ぎ去るのを待っていたわけではない。ケベック市が総力をあげてグローセ島の問題に当たっていたことは種々の記録からも推測できる。カトリック教会のモイラン神父も、7月13日の特別調査委員会の質問に答えるなかで、食糧は十分足りているが、病人一人一人に合わせた食事を用意することが難しく、病気の回復を妨げる一因となっていることを述べている。¹⁸⁾ また、移民局長ブキャナンは、行政長官のキャンベル少佐に手紙を書き、出港前の厳重なチェックと、旅客法違反者に対する厳罰を訴えている。さらに6月25日にはカナダ立法議会でも、イギリス政府に対し、移民船のスペース、食糧、医療設備の改善を要求することが決議された。このように、ケベックの人々は、飢饉がジャガイモの不作を原因とした自然災害の側面ばかりでなく、人災の側面をあわせもっていることにいち早く気づいていたのであり、彼らはその側面からイギリス政府を糾弾したのである。しかし、これを受けて事態が早急に改善されたわけではない。アイルランドを覆っていた飢餓、貧困、混乱の状況下では事態の改善はあまり見込めないことであった。少なくとも1847年は同様の状況が続いたのであった。

おわりに

1871年の調査ではカナダ国民の24.3%を占めたアイルランド系カナダ人の数は、2001年度時点で12.9%にまで減少している。大飢饉の時代にフランス系の家庭に引き取られた孤児の子孫には、フランス語しか話せない人もいるというが、アイルランド系の人々の交流機関もあり、研究も多くなされ、「アイルランド系」としてのアイデンティティ確認の機会を提供している。

暗黒の年から約60年後の1909年、島で一番高い地点であるテレグラフ・ヒルに約12メートルの高さのケルト十字が建立された。川の水面からは標高42メートルほどになるという。十字架は、多くの犠牲者がその地を目指しながらもついに降り立つことのなかったケベックの方角を向き、足元には英語とゲール語で碑文が刻まれている。1994年には当時のメアリー・ロビンソン、アイルランド大統領が訪れ、死者を追悼し、カナダの人々への感謝の言葉を述べている。

数々の困難、命をさらすような真の危険にもかかわらず、カナダの人々は偉大でした。大陸のいたるところで港はアイルランド人に対し扉を閉じていました。カナダでは、人々、特にケベックの人々は、病と困窮のただなかにあったアイルランド人に対し、並々ならぬ情を示してくださいました。¹⁹⁾

カナダでもっと早く、もっと大規模に移民に対し救済策が講じられていたならば、5千を超える犠牲者が埋葬されるという悲劇は起こらなかっただろう。しかし、イギリス領の中のフランス系都市ケベックがなかったら、そして1832年の経験がなかったら、この悲劇はさらに大きなものとなっていたことに疑いの余地はない。多くのアイルランド人にとって、カナダはアメリカへの経由地に過ぎなかった。カナダの人々は、イギリスの暴政や違法な移民船を黙従し、移民を見殺しにすること

もできたはずである。ケベックの市民を突き動かしたのは、まず第一に護身意識であったが、それと同時に、イギリスへの反感の裏返しであるアイルランドへの同情、カトリック教徒としての宗派的連帯感があったことを見逃してはならない。アイルランド移民にとって北米大陸は、苦しみのない新天地などではなかった。ここでもまた、アイルランドとイギリスの関係、イギリスとフランスの関係が反映されており、彼らはそれに否応なく巻き込まれていたのである。

注

- 1) 一時拘留者は全体の約2割で、その大半が1夜のみでの拘留だった。送還者は全体の約2%で、1892年の開所時から1924年までに約3千件の自殺があった。
- 2) アメリカ合衆国商務省編『新装版 アメリカ歴史統計第1巻・第2巻』（東京：東洋書林、1999年）参照。1844年度から1849年度までは、その年の9月末日が年度末となっている。
- 3) 入船数、死者数、埋葬者数などについては、複数の数字が発表されており、現在も、より正確な数字を把握するための調査が続けられている。当時、混乱の中で記録もれがあっただけでなく、数字が手書きされていたため、それを写す際に間違いが生じた場合も考えられている。本論文では、『証言 グローセ島1847年』で採用されている数字を使用した。
- 4) cf. Michael Quigley, “Grosse Isle: Canada’s Famine Memorial” (<http://migration.ucc.ie/conference%20and%20publications/conferences/scatterin...>)
- 5) ロンドンデリーを出港したエクスマス号は、乗員乗客207名全員が死亡した。そのほかにも難破し死亡者を出した船があったが、この年ケベックに向かった移民船で全員が死亡したのはエクスマス号のみである。
- 6) Donald MacKay, *Flight from Famine*, MacClelland & Stewart Inc., 1990, 140.
- 7) Marianna O’Gallagher and Rose Masson Donpierre, *Eyewitness Grosse Isle 1847*, Quebec: Livres Carraig Books, 1995, 30. 以下 *Eyewitness* と略記する。
- 8) Gerald Keegan, *Famine Diary: Journey to a New World*, Dublin: Wolfhound Press, 1994. 以下, *Famine Diary* と略記する。
- 9) *Eyewitness*, 377.
- 10) cf. Michael Quigley, “Grosse Isle: Canada’s Famine Memorial” 参照。
- 11) *Famine Diary*,
- 12) cf. *Eyewitness*, 177. ダグラス医師が特別調査委員会の質問に対し、船上の死亡者について説明している。
- 13) *Famine Diary*, 95.
- 14) *Eyewitness*, 50.
- 15) *Eyewitness*, 85.
- 16) *Famine Diary*, 106-107.
- 17) *Eyewitness*, 158.
- 18) cf. *Eyewitness*, 171.
- 19) *Eyewitness*, 408.

参考文献

- 綾部恒雄、飯野正子編著『カナダを知るための60章』（東京：明石書店、2003）
 木村和男編『カナダ史』（東京：山川出版社、1999）
 日本カナダ学会編『史料が語るカナダ』（東京：有斐閣、1997）
 Stephen J. Campbell, *The Great Irish Famine*, Strokestown: The Famine Museum, 1995

Colm Tóibín and Diarmaid Ferriter, *The Irish Famine a documentary*, New York : Thomas Dunne Books, 2002

参考ホームページ

Canadian Irish History (<http://irishpub.ca/history.html>)

Gerald Keegan's Summer of Sorrow (<http://www.people.virginia.edu/~eas5e/Irish/Keegan.html>)

Grosse Isle: Island of Death (<http://thewildgeese.com/pages/grosseisle.html>)

Padraic O Laighin, Grosse Isle (<http://www.members.tripod.com/gail25grosse.htm>)

The Force of Hope : Irish Immigration History (<http://www.whitepinepictures.com>)

The Great Famine and Canada (<http://www.members.tripod.com/gail25/famine.htm>)

そのほかに、ウォータールー大学（カナダ、オンタリオ州）が提供している“Immigrants to Canada” (<http://www.ist.uwaterloo.ca/~marj/genealogy/>) は、多数のリンクも紹介され、大変充実した学術的なホームページである。

Irish Immigration to Canada—Grosse Isle in 1847

Kaoru SATO

The Great Irish Famine of 1845 to 1850 produced a large amount of emigration. The destination of these Famine immigrants was the U.S., but the poorest of Ireland's poor were barely able to pay the one or two pounds of passage to America. Some of them had their tickets to Canada, cheaper than to America, paid by landlords eager to evict them and be free from the tax English government forced them to pay.

Most of passengers were packed onto small Canadian timber ships of which conditions were terribly bad for human traveling. Thousands lost their lives en route because of cholera, typhus and "ship fever".

After arriving at the Quarantine Station at Grosse Isle, lying about thirty miles downstream from Quebec City, many died of scanty of facilities and cares. In 1847 only, as many as 5,424 people were buried in this island. People in Quebec, a French-Canadian city, rose up to save and help immigrants. What drove them were the consciousness of self-defense from epidemics, the sympathy with Ireland deriving from the hostility to England, and the companionship with Catholic people from Ireland.

This paper attempts to illustrate the conditions and circumstances of Grosse Isle in 1847, by reading the diary of an Irish physician, letters and documents by people working on this island.

